

書評

宮脇 稔 編著 百田 功, 山崎勢津子 著

精神科リハビリテーションの流儀

野中 猛

精神科デイケアは、わが国のリハビリテーション活動として、今や主要な舞台になっている。精神科病院の歴史、診療報酬制度、交通事情、住居の狭さなど日本独自のさまざまな要因から、わが国の現代では、医療から地域生活への道筋、職員と利用者の交流、利用者の主体性の回復、リカバリーの過程などが精神科デイケアにおいて明らかにされ、就労支援、家族支援、地域づくりなど、多様な活動の拠点となっている。

学会などでは、「評価・プログラム・ニーズ」を合言葉のように、能力の評価、かかわりの明確さ、成果や変化の数量化が目指される。しかし、どうもそれだけではない感触がある。デイケアやデイトケアでは、丸一日をとともに過ごすために、実にさまざまな出来事が起こるし、診察室では見えない言動にお目にかかる。スタッフも、利用者と専門職との関係を越えた間柄におちいる。とても論理的な形におさまらない。

本書は、運営マニュアルなどからはこぼれ落ちるエピソードと、それに基づく気づきについて、メールマガジン「Remainders of DC」に連載した記事を編集して一書としている。著者や編者たちは、とても古い精神科病院のなかで、比較的早い段階からデイケアに取り組み、複数のデイケアやナイトケアを運営してきた。しかも延々と異動せずに、どっぴりつかったこの状況から発信している。地域活動支援センターや就労支援施設なども含めて、日中活動の“デイレキケア”という総称を提案している。

取り上げられるエピソードはユニークで、しばし考えさせられる。もちろん認知行動障害として理解

すればいいのだが、妙に支援の関係性の根本に立ち戻ってしまう。「失敗」の意義や処遇のこと、「サブケア（主担当以外のスタッフ）」のかかわり方などが、そもそものレベルで話題になる。表面的にマニュアル化してしまうことには抵抗して、個別の「脈絡」を大切にしようとする。大阪らしく、ボケ・ノリ・ツッコミといった、少しゆとりのあるかわりに意味を見出している。

もちろん、診療報酬をいただく限り、何らかのサービスを提供し、アウトカムを得なければならないわけだが、それはそれで脇に置いて、つくづく眺めてみよう、意外に広がる豊かな世界、という視点であろうか。目的を固定して、効率的な介入をすることで、利用者は委縮し、障害者である場面を増やしてしまうかもしれない。デイレキケアの場面で、「しつくりしない」感じを振り切ってしまうずに、しつこく取り上げて話し合うチーム運営の大切さについて、いろいろ想像する。メールマガジンはいまなお継続中なので、読者がこの議論に参加することも可能であろう。

評者はわずかな機会であるが、著者らと事例検討をした際に、事例情報がすべて整理されて頭の中にあることに驚嘆した。押さえるべき点はしっかり押さえたうえで、こうしたエピソードを楽しんでいることは、読者に誤解の生まれないように追加しておきたい。

(日本福祉大学研究フェロー)

●A5 変型 160 頁 2012 定価 1,890 円(本体 1,800 円+税) 文光堂